

森司教さまと過ごした二年半

渡邊眞子

司教さまへ

司教さまが亡くなってから、もうすぐ二カ月が経とうとしています。早いような、そうでもないような。私にとってこの二カ月は、寂しさからくる涙と感謝の気持ちで溢れた、不思議な時間でした。

私が初めて司教さまにお会いしたのは、二〇二一年春のことでした。上京するにあたり、家探しに困っていたところ、司教さまが助けてくださり、真生会館の近くに家を見つけられたことがきっかけでした。それから司教さまが亡くなるまでの約二年半の間、司教さまと様々な瞬間を一緒に過ごさせていただきました。司教さまと過ごしたこの二年半は、私にとって絶対に忘れられない、とつてもとつても大切な人生の宝ものです。人生に迷い、生きていることを苦

しいとしか感じられなかった二〇歳の私の緊張しきった心を、司教さまは少しずつ、優しくほぐしてくださったのです。

この度は、山根息吹さんから「森司教さまの最期の数年間を比較的近くで見ている青年として、司教さまについての文章を書いてみませんか」と声をかけていただき、こうして文章を書いています。正直、書いて良いのか悩みました。個人的なことを書くのが恥ずかしいということもあります。そして、当たり前ですが、私が司教さまのことを完全に理解していたわけでもないですし、司教さまが私に伝えようとしてくださったメッセージのエッセンスを、私が間違えて捉えていることもあるかもしれない。それに、他の人には言ってほしくない司教さまが思っていることを、ここで書いてしまうことになるのではないか。私の文章が、誰かと司教さまの繋がりを邪魔することになるのではないかと怖く感じています。しかし、私が司教さまとの関わりの中でいただいた喜びは、宣教的なものだと思いません。一人で味わって終わるようなものではなく、嬉しくてたまらず、他者と分かち合いたくなるような、人生を根本的に支えてくれる本物の喜びでした。だからこそ、ここで文章という形で分かち合わせてください。司教さまは、あまり注目を浴びることが好きではなかったから、私がこのような文章を書くことに困って、天国であの可愛い眉毛を八の字にしているのではないかと思えます。許してね、司教さま。

ありのままが良いんだよ

初めて司教さまに、自分の弱さ、どうしようもなさを打ち明けたとき、司教さまは「僕と一緒に人生の旅に出ましよう」と仰ってくださいました。それから、司教さまは定期的に時間を作ってください、私の話を黙って優しく聞いてくださり、大切なことをたくさん教えてくださいました。その他にも、朝ミサ後に数人でコーヒーを飲んだり、たまに一緒にご飯を食べに行ったりして、そんなときは、司教さまの若い頃のお話をよく聞かせてくださいました。私にとって、本当のおじいちゃんのような、最も年の離れた友人のような存在でした。この文章は、私がそんな司教さまからいただいた大切なことを中心に、司教さまとの思い出を綴る文章にしたいと思います。

まず、私が司教さまからいただいたものは「ありのままのあなたで生きて良いんだよ」という安心感でした。あるとき、司教さまに「自分のこういうところが許せない」と、私としては否定的にしか捉えられなかった自分について話しました。そしたら「そっか、あなたは純粹な人なんだね」と、どうしようもないと思っていた自分のことを、司教さまは「純粹」と呼んでくれました。そして間髪入れずに「変わらなくていい。それがあなただから。そうやってみんな妥協して、普通になっていくのだから。そのありのままのあなたを大事にして、育てなさい」と、肯定してくれました。

私は当時、自分のことも、周りの世界のこと、能力主義の目でしか見られなくなっていました。そして自分の基準で自分を評価し、自分の諸々の特徴を弱点と長所に分け、弱点と思わ

れた特徴ばかりにフォーカスして生きていました。しかし司教さまは、そういった私を「ありのままのあなたを恥じる必要はない」と励ましてくれました。

その言葉をいただいたとき、私の心の飢え渴きが潤されていくような気がしました。そしてものすごい安心感に包まれました。それまでの私は、弱点だらけのこの私がありのままで良いはずはなく、弱さのない完璧な人間になるよう努力すべきで、能力のあることが、自分の存在が許される最低条件だと思って生きていました。だから比較の中で生きて、必死に私を満たすことのない水を探し、飲み続けていました。でも私が本当に欲しかったのは、私自身が自分を *doing* ではなく *being* のレベルで見つめ、大切にしてあげられるようになることでした。満たされることよって初めて、自分の飢え渴きが何だったのかを知りました。

しかし一方で、そのとき、司教さまはこうも仰ってくださいました。「自分の飢え渴きから目を逸らさず、妥協せずに生きなさい」と。「ありのままが良い」ということは、自分の人間としての限界や弱さから目を逸らすことではなく、むしろそれを受け入れ、しっかりと向き合うことでしょう。「自分の苦しみから解放されるための唯一の方法は、その苦しみから逃げないことだよ」という司教さまからいただいた言葉も、よく心に残っています。

善さも弱さも全て含んだ「ありのままの私」で生きて良い。弱さをなかったことには出来ない、この妥協しない生き方も、それはそれで苦しいところがあるでしょう。しかし私にとって、この「ありのままが良い」という確信が人生の土台であり、安心感となりました。

他者とともに

次に、司教さまは「他者に開かれて生きていくことの大切さ」を教えてくださいました。あれほどに頭が良く、知識もあつた方が、自分だけの世界を作り上げたり、自分の殻に閉じこもったりせず、人との出会いを何よりも大切にしていたことに、私はいつも驚かされていました。

司教さまは、幼少期の戦争体験により、高校生の頃から全てが空しく感じられ、自分の生きる道は宗教にしかないと感じていたそうです。だから絶対的な拠り所、精神的な憩いの場を求めて修道会の門を叩いたけれど、自分が内面の問題にだけ向かっているうちは修道生活が苦しかったと仰っていました。「人間の真の救いと成熟は、他者の存在に目覚め、心の交わりを生きていくことによつてこそ、もたらされるものだ」と気がついたとき、キリストの愛という出口に導かれ、長く暗いトンネルから抜け出せたという経験をされたようです。だからこそ、人と誠実に向かい合い、交わることをとても大事にされていました。

あるとき、私が何の気なしに「司教さま、大変ね。私のような迷える子羊がたくさん司教さまのもとに来て」と言ってしまったことがあります。私は司教さまから叱られたということは一切ありませんでしたが、そのときは割とびしゃりとしたトーンで、「そういうことではないよ。僕のところに来る人が迷える子羊で、僕がみんなの羊飼いということでは全くない。みんなが、それぞれの状況の中で必死に生きている。そんなみんなから僕は学ばせてもらっているの」と仰っていました。

ハッとしました。この方は、一人ひとりを中心に尊び、私のことさえも、対等な存在として

誠実に向き合ってくださいているんだ、と。司教さまご自身を含めたどんな人間にも、弱さや苦しさがあ、限界を抱えながらも必死に生きているのだということを深く理解されているのだ、と気づかされました。司教さまはよく「共感力と受容能力を鍛えると良いよ」と仰っていました。人の悲しみや苦しみに共感して、どんな人でも受け入れる。それが司教さまの生き方だったように思います。だから司教さまは誰のことも責めなかったし、バカにしませんでした。「人をバカにしない」―シンプルで当たり前の道徳のように思われますが、これが人間にとってどれほど難しいことだろう、と私は日々の生活の中でよく感じます。私にとって司教さまは、葬儀ミサで読まれた福音箇所にあったように、本当に「柔和で謙遜な者」でした。

他者との交わりを恐れ、他者と信頼感ある関係を構築しようとしなかった私でした。しかし司教さまという信頼できる人との出会いは、私を変えてくれました。人は人を癒すこともできるけど、傷つけ合うこともできる存在です。だから今でも他者との交わりが怖く思える、逃げたくなる時は多いです。しかし今は、人との出会いにしか私たちの救いはないのだろうと、そして、そこにこそ人間にとっての最上の喜び（それは神との出会いということになるのでしょう）があるのだろうと確信しています。

「人がひとりでいるのは良くない」という創世記が示す「人間は一人では本当の喜びを見つけられない、一人では人生を全うできない」という聖書の根本的な人間理解も、司教さまが教えてくださいくださったことです。

司教さまにとっても、他者と共に生きていくことはチャレンジだったのではないかと思いま

す。司教さまはシャイで、目立つことが苦手な方だったから、他者と深く交わる生き方が、ときには司教さまにとっての十字架になっていたのかもしれないな、なんて想像していました。だからこそ私も、諦めないで、逃げないで、他者と共に生きていくというこのチャレンジを続けていきたいと思っています。

私たちの幸せを願う神さま

そして司教さまには、神さまについての話もたくさんしていただきました。私はカトリック信者の家庭に生まれ洗礼を受けてはいたものの、司教さまと出会うまで、神さまについてもよく知っているととても言えませんが、全く知りませんでした。

司教さまは、神さまについてたくさんのことを教えてくださいましたが、その全てに通底していたことは、「神さまが、イエズスが、どれほどまでに私たちの幸せを願い、大切に思ってくれているか」ということだったと思います。

司教さまが聖書についてお話してくださるときは、まずどこまでが教会の長い歴史の中で人間によって作られた伝統に属することなのか、どこまでが当時の文化的・自然環境的要因が反映されていることなのか、という背景を丁寧に解説してくださいました。そしてそのうえで、イエズスが伝えたかったメッセージのエッセンスがどこにあるのかを教えてくださいました。

それが出来るのは、もちろん司教さまに神学の深い理解があったからでしょうが、「僕は仲間間の神父さまたちから『神学の解体業者』だと言われている」などと言って、笑ってらっしゃ

いました。人々の生活の現実にも敏感であった司教さまが語るイエズスの姿は、優しさに溢れていて、心にスツと入ってくるものでした。

私は司教さまに、何度もしつこく神さまについて、聖書について「なんで？」を連発しながら、質問していました。司教さまは何度も同じことをしつこく聞いてくる私に、いつも辛抱強く、優しく付き合ってくれました。ここに「神を信じている」と躊躇なく書けるほどの信仰があるか自信のない私ですが、司教さまとの交わりを通じて、私が神さまに無条件に愛されること、その愛に喜んで応えたいと思う私がいることを感じさせられています。

司教さま、ありがとう

九月二日に、司教さまが亡くなったという知らせをもらったとき、驚きはしたし、信じたくない気持ちから涙が溢れたけれど、私にとって、突然の知らせではありませんでした。今年の春に手術を受けられてから、日に日に痩せていく司教さまのお姿を近くで見ても、お別れのとかが近いのかもしれないと感じていました。六月ごろのことだったと思いますが、私より細くなった司教さまの腕や、時々みんなから見えないところで辛そうにしている司教さまを見て、司教さまがもうすぐいなくなってしまうかもしれないという怖さが募り、「いつまで生きている？ まだ死なないでほしい」と泣きついたことがあります。そのとき、司教さまは「僕は今、体はしんどいけれど、イエズスさまのありのままの姿を、一人でも多くの人に伝えることを使命に、それだけで生きているの。だから神さまは僕にもう少し時間をくれると思うの。だから安

心してね」と仰っていました。そしてそのお言葉通り、そのときの司教さまの健康状態からは考えられないようなスケジュールで、最後の最後まで黙想会や講座のために、各地に出向いていらっしやいました。自分のためではなく、人のために、神さまのために心を燃やす、そんな司教さまの生き様を見て、「少しでも長生きしてほしい」という私の願いではなく、「もう全ては神さまの御心のままになりますように」という祈りしか出てきませんでした。

ワールドユースデイに参加するため、ポルトガルに出発する日の朝にお会いしたのが最後までした。帰国後、すぐに電話をかけて、少し話しました。いつも私を心配させないために、何を聞いても「大丈夫、大丈夫」と答えてくれていた司教さまでしたが、最後の電話では「少し体調が良くない」と正直に仰っていたので、本当に最期が近いかもしれないと感じました。そして、「よくなったらまたワールドユースデイのお話聞かせてね」と言ってくれました。

司教さまが亡くなってから約二カ月、どうしようもなく寂しいです。でも正直に、そして語弊を恐れずに言うならば、ある意味で司教さまの死は悲しいことではないと思っています。司教さまと過ごした時間や、司教さまが私にくださった言葉は、死に勝る本当に永遠なものだからです。そして司教さまは私に、言葉通り、いのちを与えてくれました。司教さまだけが私を救ってくれたわけではないけれど、司教さまとの出会いがなかったら、今頃私はどうなっていたかわからないな、と思います。少なくとも、明日を生きたい！と思って、明日への希望を持って、人生を歩めてはいなかったと思います。人生に対する根本的な安心感や、人生を肯定的に捉える気持ち、人と交わることの困難とその喜び、全て司教さまが私に教えてくれたことです。

だから虚しいことは何もありません。恐れることはもう何もないと感じています。

もちろん死別という形は望んでいなかったし、それは永遠にやって来ないで欲しかった。しかし、司教さまからの旅立ち、つまり自分の人生の歩みを主体的に始めていく時期は、いつか来るはず、そして必要だとも思っていました。だから私にとって、これからは人生の新たな段階となるでしょう。司教さまが亡くなってから、よく泣けてしまうけれど、心は不思議と前より落ち着いています。

「疲れたもの、重荷を負うものは誰でも私のところに来て、休みなさい」というイエズスの言葉を体現し、ご自分でもよく「僕は止まり木のような存在になりたい」と仰っていた司教さまのもとで、私はもう十二分に休ませてもらったと感じています。もう肉体としては会えないけれど、この別れによって、司教さまの being や言葉や優しさが、本当の意味で私の魂に刻み込まれたと思います。だからこれからは、いやこれからも、司教さまと共に歩むことができると感じています。

また心新たに生きています。自分の弱さを見つめ、諦めないで、神さまに心を向け、一生懸命、光の中を生きていきます。どうか天国で、温かくて、棘のない柔和な、憐れみの神さまの腕の中で、安心していることができそうです。そして先に天国に行った全ての兄弟姉妹のみんなをよろしくね。司教さま、本当にありがとうございました。またね。

そして司教さまとの出会いを通じて、このような私にも目を注いでくださった神さまに感謝します。